

泉鏡花の逸文

吉田 遼人

本稿は、『鏡花全集』別巻（第二刷／岩波書店、平成元年一月）および『新編泉鏡花集』別巻一（「拾遺」／岩波書店、平成十七年十二月）に未収録の逸文、関連資料を計九点、紹介するものである。

紹介に際しては、掲載紙誌の本文をそのまま翻字し、これに注記を添える、という体裁を採り、書式を以下のとおりとする。

一、表題のあとに【典拠】として、文献の原文を示し、【注記】の項には内容の解説、考証等を記した。

一、引用文のかなづかいとルビは、原文のままとし、字体を概ね現行の印刷文字に改めた。

一、句読点の脱落と、誤植と考えられる漢字は、「」内に補正した。

一、必要に応じて、「＊」のあとに注記事項を補った。

一、本稿の書式については、吉田昌志氏『『鵬外全集』の逸文・注記』（『学苑』第八九三号、昭和女子大学、平

成二十七年三月）を特に参照させていただいた。記して深謝申し上げます。

1 現代の小説と『三十六類』

【典拠】『日本実業新報』第五十八号、明治四十二年七月二十五日

*署名「泉鏡花」。6面。傍点は原文。活字の大きさは均等とした。

僕が小説眼を以て衣服其他雑貨を怎う研究してゐると訊ねるのですか、イヤ研究といふほどの事を為した例もないが、畢竟小説家個人個人に依つて其研究法を異にしてゐるのは確である。某小説家などは往還へ出る度に、通行人の彼れや誰れやを克く注目して頭悩〔脳〕に印象を止め是れを筆に現はすのだ、即ち通行人をモデルと為るのである、此の方法は能く現代の流行を描出すに適切であるから、斯の画家なども随分此法を採る、實際想像以外にして且つ幻妙な皺―衣服の皺を発見することが往々あるさうだから僕も此の方法で大に研究して見たいのだが、悲しい哉御覽の通りな眼が悪い（近眼）ので其の衣服其の洋傘の色含柄等を明瞭に識別することが出来ない、例へば其処を一人の婦人が通るとすると実際に天然美で顔の色が白いのか化粧をした結果色が白いのか其判別に苦しむやうな滑稽を演出する〔 〕。仍で僕は研究するといふこともなく、自然的にまア此の問題を解決して來たと云つた訳であるが、まだく研究が足りないのである。大体現今の小説の傾向といふものが以前から見ると余程變つて來てゐる、衣服其他雑貨等を、小説中の人物に配するといふ一事は執筆者に主く措れてゐないので所謂お景物に過ぎないのだ、偶々是を精細に描く小説家があるけれど、残念ながら一から十まで其人物に相応しいものを配してないさうで、識者が眼に映ずる処を訊くと、

洵に滑稽のことが多いさうだ、所謂若い人に適切な髪飾りを老人に配したり、或は老人に適確な衣服の色合模様などを若い人に配する等が即ち其例である、といふ僕にも實際斯んな婦人には斯ういふ洋傘が似合ふとか、斯ういふ男には斯んな帽子が好いとか云ふ鑑別が判らないのだ、けれど要するに其洋傘なりハンケチなり其外種々の雑貨類を描くに當つてその男、その女に尤も相応いと読者に惟はせるには、其物品の色合を描く方が読者に深く印象を与へるやうである「」仍で僕は総て此の方法を採つてゐる。即ち此の方法から打算して、尤も読者に深く記憶されてゐる物品の名称を挙げて描くも亦必要なことだと思ふ。即ち脊のスラリと為た婦人を描く場合には風通を着てゐると云ふよりは御召縮緬を着てゐると云へば怎うしても脊がスラリと為てゐるやうに想像される、又白粉に於てもさうである、例へば現代のハイカラ婦人を描くに當つて、御園白粉を使つてゐると云へば、忽焉として読者に深い印象を与へるし、稍往昔に沂つて高雅な婦人を描くならば、仙女香を用ゐてゐると云へば文字が既に、香といふ匂ひを露はしてゐるので読者は直に麗しい感に打たれるのだ。

併し前述の如く唯色合をさへ適切に描がけば誤謬「謬」が少なくつて、読者に深刻な印象を与へるとは雖その人物の性格、その場所、その時に應じて種々に研究執筆せねばならない、例へば真昼と闇夜、電燈の下と月影を浴びてゐる場合又は暗い行燈の側、等にある人物などは個々別々に、その衣服その雑貨の色合を露はさねばならぬので。併て今月下に逍遙してゐた婦人がある事件、ある脚色の都合に依つて、俄に電燈の下に呻吟するといふことを描く場合は、鳥渡其色合に執筆者は困る、何故かと云へば、其婦人の思想も變つてゐるし又月の光りと、電燈の輝きは衣服その他ハンケチの色合と深い関係があるので、怎うしても、その婦人に

以前より變つてゐるものを着せ、異つてゐるものを持たせねばならない、即ち僕等が聊か閉口する場合だ、が併し斯んな時は何んとかして、旨く婦人を活躍させるのである。

前に云つた如うに、是等雜貨類の研究は現代の小説家に主を措かれてゐないが、併し僕の先生（尾崎紅葉）などは実に能く研究されてゐた、その方法は怎うであつたかは不幸にして識らぬけれど、終始ボンヤリして他人と相対することがなかつた、一視一瞥はその衣服の総てを尽し、その雜貨の奈何を洞察したのだ、是れが姑て筆の上に縦横に露はれて東都の紙価を貴からしめたのであつた。或人は斯んなことを云つた、『紅葉先生は紫の羽織紐を締めてゐる』と、間違ひは無いと、問逆其麼ことは無かつたか、世間の人が爾う風評をするまでに、先生は御自分の服装等の色合の調度に厳しかつたのである。だから他人が上等な煙草入を進呈すると云つて来ても、御自分に相応はしくないものとお認めになると、その品を返戻して丁ふと云ふ態であつた。併し前に云つた通り、雜貨等の研究は現今では殆ど不必要に思はれてゐるので研究する人が到つて少ないと云つた所で僕は決して是れを非難するのではない、否實際、其品が何処で製造されて、大さが何の位で、品質が悪いとか、良いとか夫れほど深く研究する必要があるいかも知れぬ、斯の古の武士を描く場合は、その鎧その小手脛当大小の作り等精緻に遣ればやるほど其の人物の奈何を明瞭に露はされるが、目下の傾向は全然是れと異つてゐる。

何に……？ 文士招待会は継続されるといふのか、勿論、年に二回は実行されるので……イヤ陶庵侯「侯」は仲々通人だ。文学——殊に仏蘭西語には通曉してゐられるし、音楽——殊に琵琶もお手の内ださうだし、料理法にも多少お心得があるといふことだ、ハ、ハ、ハ、だから何時も芸者連はテレ、氣味で、大こぼしなのである。

何に僕が何時も忙しいだろう……と云ふのか、お世詞は止して呉れ、アハ、、併し晦日前は揮「渾」身の勇気で描くよ、僕たつて鞆を提げた鬼は恐いからなア。

こんな風だから、料理屋でも余程念入に調理するさうだ、併し我々仲間の文士には、其んなことは少しも判らない、唯上臆と下臆が活動するばかりサ。

（記者曰く、三十六類とは商標法の類別に依るものにして則ち被服類にて衣服、冠、帽子、「カラ」、「カフス」、襟飾、襯衣、「ズボン下」「」手袋、足袋、目利安等を指す）

【注記】

掲載紙『日本実業新報』は、明治四十年（月日は未詳）に創刊され、大正四年五月まで号数を重ねた（大正四年六月、『日本商工新報』との合併に伴い、『日本商業新報』と改題）。確認できた最古の号（第十四号、日本実業新報社、明治四十一年五月十日）では、題字の傍らに「総ての服飾品和洋小間物玩具等の流行より、実業界の事情は悉く之を網羅し、商業の方面より工業の点より文芸の側より之を觀察し之を評論す」との記載が見え、典拠の第五十八号（日本実業新報社、明治四十二年七月二十五日）においては、「メリヤス・帽子・織物・糸物・和洋小間物・文具・筆墨・玩具・洋傘・雑貨及服飾品に於ける日本第一の機関新聞なり」と謳われていた。

このような媒体からの依頼に応じ、鏡花は、「衣服其他雑貨等を、小説中の人物に配するといふ一事」をめぐる談話を寄せたことになる。題名に含まれる「三十六類」については、文末で「記者」が、当時の「商標法施行細則」（機村政富編『日本登録商標大全 摺附木之部』東京書院、明治三十八年十一月）をふまえた説明を添えているとおりである。

談話中、「雜貨類の研究」に「主を措か」ない「現代の小説家」ならびに「現今の小説」として想定されている対象については、具体的な言及がなく、判然としない。とはいえ、当時は自然主義に対する反駁を重ねていた折りであり、引き合いに出されていたのが「僕の先生（尾崎、紅葉）」であった点などは、注意されてよいだろう。

唐突に話題が転ずる終盤では、「陶庵候」の「文士招待会」（すなわち、西園寺公望が主宰する雨声会）の「継続」を訊ねられた鏡花が、「勿論、年に二回は実行されるので」と答えている。しかし、周知のとおり、雨声会は、明治四十年には二回開催されたものの、明治四十一年以降は年一回の開催であった。「年に二回」の箇所は、誤植であるように見受けられる。

■ 2 文星歴訪録 △ 泉鏡花氏

【典拠】『活動写真界』第十四号、明治四十三年十一月一日

* 無署名。8～9頁。傍線、傍点は原文。目次には「着色物がい」との題が付されている。

秋の涼風は袂を盛んに颯るけれど、尚残りの暑さの、兎もすれば額に汗を掻かせやうとする初秋の其の日、泉先生を麴町のお宅に訪づれた。奥様に導かれたのは、広々としたお二階の間、凡ての体裁は此前御紹介した、柳川先生のお座敷と大同小異である。一口に云へば硯友社式とでも云ふのであらうか。

『私は活動写真の盛んになりかけて来た時に、丁度逗子に居たので、東京へ帰つて来たときには、其の盛況

に驚きました。元来私は活動写真は至極好きなのですから、方々のを見て歩き廻るのです。」それで、私に言はせると、演劇物は日本出来たと船舶来たるとを問はず絶対に反対です、見る物く一ツとして粗悪且つ蕪雑ならざる物なしといふ有様ですから全く可厭になります。先日外国出来のリア王を見ましたがイヤ何うも筋と云ひ俳優の動作と云ひ支離滅裂見るに堪へないものでした。」「此様な風にして演じては、実にセークスピアを侮辱してゐると云つても言過しでは有るまいと思ひます。又弁士の説明に定つて、こゝに歐洲第一の美人何々と云ふ者がありまして云々とやるが、出て来る其美人と云ふのは、何れ程美しい女かと思つて見ると、歐洲一どころか、美人でも何んでもない、寧ろ醜婦に近いやうな女の時さへある。此様なのは非常に感興を殺ぐ原因で有ります、さうかと云つて脚本上では美人なのでせうから、不美人が有りまして説明は出来ない、困つたものです。是れが実際の芝居で有ると、其れ程美しい顔で無くても、衣服の色彩で有るとか、紅白粉の使ひ方で有るとかで、相応に美しく、美人らしい感を見物に与へませうが、其れを直に捉へて来て、活動に写つして、芝居で見た時と同じやうな感を与へやうとは無理な注文です。これは日本のとても同じ事で、華族の家の障子に穴が明いて居たり何かして、気持ちの悪いものです。これとても矢張り舞台上で見る時には、障子の穴ぐらゐる、有つても目立たないのですが、写真にすると、可厭に目立ちます。それから進んで演劇物が反対の理由を述べますと、拙い可厭な物を見た跡で見ると、折角巧い面白いものにも徒らに悪感情のみを与へるやうな事になつて仕舞ふと思ふ。例へば清水一角なら清水一角の芝居を活動写真で見るとする、空ツ下手の役者が、拙い表情か何かで、盛んに荒れ廻つてあゝ可厭だ、拙いものだと云ふ感じを我々に与へたとします、其の下手なのを見た後に、爰に稀世の名優が出て来て、演じた同じ清水一角

を見た時には必ず先入主となつてゐる、あ、彼処であんな顔を活動ではしたつけ、あ、此処では此様な動作をしたつけと、古い記憶を呼び起して、實際面白く、見るに足るべき名優の技倆をさへ、可厭な思ひを起させるだらうと思ひます。云ふ迄もなく、演劇なるものは、見るばかりでなく耳にも訴へるものなのですから、それが巧く調和するのでさして美人ならざる者も美人に見え、面白いとか可笑しいとか悲しいとかの感じをも起させるのでありますが、これに反して活動は目にばかり訴へるものなのですから、一緒にしやうつたつて、出来るものぢやありません。従つて、上手な俳優が活動劇を写しても、其俳優の技倆が残らず写せるものでは無いだらうと思ふ、活動写真にする芝居と、舞台上演る芝居とは、其間に自ら差が有るのですから、特有の美点を写真の上に現せるか何うかは頗る疑問だらうと思ふのです。だから私は活動写真と演劇とは、別れた方が能いだらうと思ひます。何も演劇物を写さないから活動写真が滅亡すると云ふ訳では有りますまい、演劇物以外に必ずや活動に適するものが有るに違ひない、有るけれど、気が付かないのか、気が付いてゐても写さないのかの二つに過ぎないだらうと思ひます。私の能いと思ひ、見たいと思ふのは風景の写真です、瀬戸内海の景色などは写せないものでせうか、船が進むに従つて、刻々に変る明媚な光景は屹度大喝采を博するだらうと思ひます。或は倫敦の十分間とか、巴リの何分間だとかに起つた事柄を写しても、面白く無い事はないでせう。又自然でなく、拵へた事を写すのには、無邪気な何方かと云へば子供に向くやうな物が能いでせう、能くある逃出す追掛ける、転ぶ、起る、従つてドン／＼場面が変化して行くと云つたやうのが見て居て甚だ面白い。それから演劇物では一向感服しないが、演劇物以外の作り事に於いては、中々面白く、時にはホロリさせるやうな物も無いでは有りません、先日見たのに斯う云ふのが有りました。それ

は二人の孤児が有つて、親々のお墓へ花が上げたいが、花を買ふ事が出来ない、悲しい事だと嘆きながら一つの公園へ這入つて来ると、花園に花が一杯咲いて居るので、欲しいなと思ひながら四辺を窺つてゐる、そうすると先刻から此の孤児の様に目を付けて、公園の番人が後から見え隠れに従いて来たが、愈々子供が花を採らうとする時に、捉まへて詰問すると、一切の事情が判明したので、番人も貰ひ泣をして、一緒にお墓詣りをすると言ふ極く単純な筋では有るが、孤児の様子と云ひ、年を取つた番人の態度と云ひ、さのみ大きな公園で撮つた写真とも見えなかつたが、公園内の場所の變つて行く所などが、巧みに写されてゐるので、覚えず感心して仕舞ひました。それから活動写真見た目が奇麗でなければいけません。着色と云ふ事が大必要だらうと思ひます。先づ私の考へは此様なところでです。』

西と東とが、ガラリと開いて、風通しのいい 明るいお座敷、暫らく先生と閑談もしたかつたので有るが、折柄の御来客に、残り惜しくも其儘辞し去つたのであつた。

【注記】

掲載誌『活動写真界』は、明治四十二年六月、日本活動社より創刊され、第二十六号（明治四十四年十一月）まで確認されている「現存する日本最古の映画雑誌」である。「雑誌発行を支えるとともに、雑誌を通して自社作品や系列館の宣伝に努めた」のは、映画製作会社・吉沢商店であつた（岩本健児「解説／台頭期の日本映画界」『復刻版 活動写真界』第一冊、国書刊行会、平成十一年九月）。

巖谷小波が「顧問」（無署名）『巖谷小波氏の帰朝』『活動写真界』第四号、明治四十三年一月一日）を務めた吉沢商店は、活動写真『通夜物語』（明治四十三年四月十五日、美音館封切）、『辰巳巷談』（明治四十三年九月十五日、三



『活動写真界』第十三号・口絵

(『復刻版 活動写真界』第二冊／国立国会図書館蔵)

友館封切)を製作しており、そのように(鏡花もの)を手
かけていた縁もあって、『活動写真界』に鏡花の談話掲載
が実現したと考えられる。なお、第十三号(明治四十三年
九月二十五日)の口絵には、『辰巳巷談』のスタイル写真も
掲げられていた。

典拠の「文星歴訪録」では、鏡花とともに江見水蔭の談
話も掲載。ほかの号には、小川未明、正宗白鳥、徳田秋江、
中村星湖、窪田空穂、相馬御風、三木露風、島崎藤村、伊
原青々園、佐藤紅緑、石橋思案、長谷川時雨、塚原涉柿園、
徳田秋声、三島霜川、岡本綺堂、前田曙山、広津柳浪、石
井柏亭、小杉未醒、北沢楽天、鍋本清方、伊井蓉峰、川上
音二郎など、多くの文士、画家、俳優らの活動写真観が紹
介されている。

本談話では、「演劇物」は「絶対に反対です」、「活動写
真と演劇とは、別れた方が能いだらうと思ひます。」など
と鏡花の見解が表明されており、その活動写真観の一端が
伝わってくる。また、「能くある逃出す追掛ける、転ぶ、

起る、従つてドン／＼場面が変化して行くと云つたやうなのが見て居て甚だ面白い。」という感想や、「活動写真は見た目が奇麗でなければいけません。着色と云ふ事が大必要だらうと思ひます。」といった「考へ」は、後年の梅村蓉子との対談（「一問一答録 泉鏡花と梅村蓉子」『映画時代』昭和三年一月）においても繰り返されていたところだが、それらが明治四十三年にすでに抱かれていたことも、このたび明らかとなった。

談話中、鏡花が例として挙げた「清水一角」の活動写真は、吉沢商店製作のものが明治四十二年四月二十日、三友館で封切られていた。「外国出来のリア王」は、世界映画史研究会編『舶来キネマ作品辞典』（科学書院、平成九年七月）等にあたったものの、該当する作が見出せなかった。鏡花が「覚えず感心して仕舞」ったという「二人の孤児」の活動写真についても未詳である。

談話の冒頭部分では、鏡花の「広々としたお二階の間」について、「凡ての体裁は此前御紹介した、柳川先生のお座敷と大同小異である。一口に云へば硯友社式とでも云ふのであらうか。」と感想が記されていた。ここで見き合ひに出されたのは、前々号において、「木口を選んだ新築の、広々としたお座敷は、東向で気持がいい、立派な本箱の中には、言ふまでもなく和洋の書物、又其の上には小さな奈良人形だの、刀剣だの種々なものが載せられてある」と紹介された柳川春葉の座敷である（無署名）「文星歴訪録」『活動写真界』第十二号、明治四十三年八月二十五日）。

「元来私は活動写真は至極好きなので、方々を見て歩き廻るのです」と述べていた鏡花は、その後、「久しく映画つてもものを見た事がありません。」（「一問一答録 泉鏡花と梅村蓉子」／前掲）と距離を置くことになる。とはいえ、活動写真（映画）受容の実態は、鏡花文学を成り立たしめる一要素として解明されてゆく必要が

あるだろう。

言い添えておけば、鏡花と活動写真とをめぐっては、片桐童二によっても、「作家泉鏡花の如きは、活動写真に自分が撮影されることを極度に恐れ「自分が死んだあとでも、自分の幻影が生きていて動いたりするのを考えると、薄気味わるくて、がまんができない」といつていた。」という挿話が遺されていた（ああ 活動大写真―少年の日へのわがノスタルジア―）『日本及日本人』 日本及日本人社、昭和五十二年十一月）。

■ 3 泉鏡花帝劇を嫌ふ所以

【典拠】『実業之世界』第十三卷第二十四号、大正五年十二月一日

*無署名。78頁。

いづきやうわ たうだい
泉鏡花は当代の名匠だけあつて、却却外かの小説家などに見る能はざる奇行やら奇想やらに富んでるが、何うしたものか帝国劇場が大の嫌ひで、未だ曾つて一回も足を踏み入れたことが無い。近頃新しがる某文士、鏡花の許を訪ねて四方山の話の序に、大に帝劇の功德を述べ立て「初めて帝劇を見物すれば、何んとなく芝居に這入つたやうな気分になれず、甚だ物足らなく感ずるが、兩三回通つてから歌舞伎座とか市村座とかいふやうな旧式の小屋に這入つてみれば、第一窮屈で不快を感じ、第二に穢いので厭になり、帝劇が馬鹿に氣に入るやうになつてしまうものだ」と云へば、鏡花「なるほどそれは爾うかも知れぬが、私の帝劇を嫌ひな所以は、その建築やら設備やら乃至は又気分やらといったやうなものでない。あの劇場が抑々今を去る

八年の昔、開場式に発した招待状の文句が気に入らなかつたので、今日に至るも猶ほ帝劇がイヤで（溜らぬのだ）との事に、某文士「そんなら、その文句は何んなものでした？」と重ねて問へば「なんでも大倉喜八郎の名で発せられたものであつたが、特に末尾に附箋して、御来臨の節は袴羽織で御出で下されたいといふやうな意味が書いてあつた。これがグツと癪に障つたのだ。苟も開場式とか何んとか祝ひ事の案内を受けて、愈々出かけるといふ段になれば、平生は質屋に入れて置くにしても其日に限つては特に受け出して、羽織の一枚も引つかけ、袴の一つも穿いて行くやうにするのは、敢て先き様から注意せられるまでも無く、誰とて当然為すべきの礼である。それを、特に附箋して注意して寄こすとは何事だ？ 実に怪しからんと思つたら、それつきり帝劇が食はず嫌ひになつてしまつたのである」との事に、某文士も「それでは致し方の無いこと……」で引きさがつたとやら。

【注記】

掲載誌『実業之世界』は、明治四十一年五月、三田商業研究会より創刊（前身は『三田商業界』、巻次は継承）。第六卷第五号（明治四十二年五月）から発行所が実業之世界社に変わり、昭和六十年二月まで巻号を重ねた。

言及されている帝国劇場の開場式は、明治四十四年の三月一、二両日にわたつて挙行された。大倉喜八郎（天保八年九月二十四日～昭和三年四月二十二日）は、明治四十年二月に創設された帝国劇場株式会社の、取締役を務めたひとりである（『帝劇五十年の歩み』／帝劇史編集委員会編『帝劇の五十年』東宝株式会社、昭和四十一年九月）。

その「大倉喜八郎の名で発せられたもの」とされる開場式「招待状の文句」については判然としないが、たとえば永井荷風は「帝国劇場開場式合評」（『三田文学』明治四十四年四月）を、「午後四時から始まる会へ燕尾服だの

デコルテエの著物なぞ夜の遊びの服装をして来いと案内状に書いてあつたが、どうもあれは受け取れぬ。」と書き起こしていた。もつとも、「午後五時の茶会ファイフ、オクロックチーでさへ西洋ならば昼の服装ときまつてゐる。日中の四時から夜の著物は恐入つたよ。」と続けられているとおり、荷風と鏡花それぞれの批判は、おのずから観点を異にする。

鏡花と帝国劇場とをめぐつては、俳優、映画監督として知られる田中栄三の伝える挿話が、すでに吉田昌志『泉鏡花素描』（4 泉鏡花と演劇—新派・新劇との関係から「夜叉ヶ池」に及ぶ—）／和泉書院、平成二十八年七月）に言及されている。すなわち、田中栄三が帝国劇場での「登張竹風、泉鏡花共訳の「沈鐘」」上演を企画して「鏡花さんのお宅へ承諾を求めに行つた」際、「鏡花さんはおやりになつても好いが、帝劇は見物をしながら煙草がのめないから、それから先に改良して下さいというので、私はひどく困つてしまつた。」（千桑山房の森鷗外先生）『新劇その昔』文芸春秋新社、昭和三十二年十月）という挿話である。田中栄三を困らせた鏡花の帝劇嫌いは、明治四十四年の開場式「招待状の文句」に由来していた点が、このたび判明したことになる。

■ 4 都会詩の情調 —三筋町と三味線堀—

【典拠】『実力世界』第八卷第二号、大正六年二月五日

*署名「泉鏡花」。26～27頁。

散歩さんぽは現実げんじつの念ねんに囚とらはれないのは勿論もちろん、目的もくてきや手段しゅだんを頭あたまに持つてすべきではない。行き当りゆあたばつたりで、虚心平氣きしんへいきにぶらりと出て、行けば巷ちまたの人の蠢うごめく中うち、そこに皮肉ひにくや冷笑れいせうや涙なみだや血ちや、歡樂くわんらくや恐怖きやうふやが絵巻物えまきものを

展ひらげた様やうに現あらはれて来くる、中なかにも私わたしの散歩さんぽに於おいて最もつとも懐なつかしく思おもふのは、名残なごりを止とどむる江戸えどの昔むかしの、咽むせ返かへる様やうな匂におひの思おもはぬ処ところに溢あふれて居ゐることである。それを嗅かぐ為ために、私わたしは屢々しばしば浅草あさくさの三筋町さんしんちやうや、深川ふかやの方面ほうめんへ歩はを運はこぶ。「」例たとへば浅草あさくさは公園裏こうえんうらに駒形こまがたに今いまも大江戸おほえどの佛おほかげを忍しのばれるが、殊ことに三味線堀みせんぼりに沿そつた御徒町おかちまちから東ひがしと北きたの三筋町さんしんちやう、それからお蔵前くらまへに出るまでの間あひだ、悪魔あくまの狂奔きやうはんする様やうな電車でんしやの響ひびきも聞きこえねば、圧あつする如ごとき洋館やうかんの薨ならも並ならんで居ゐない。昔むかしながらの狭い横町よこちやうが重なり合あつた様やうにせ、こましく通とほつて、細々こまかくした店頭とほには、時ときとして紺こんや洪茶しふぢやの暖簾のれんも下さり、小刻こきぎみに過すぎる素足すあしの女をんなの眉まゆを剃そり落おとした痕あとの青あをいを見みることもある。一帯たいに調子てうしが乱みだれて憐あはれつぽくて淀よどんだ三味線堀みせんぼりの水みづに映うつる日蔭ひかげも淡あはい、道行みちゆく人も大抵帽子たいいぼうしを被かわらない、角刈かくがりの兄哥あにいか、襟えりの黒い銀杏返いちやうがへしの娘むすめである。これが深川ふかやとなると一層印象そういんしやうが鮮あざかである。殊ことに木場きばの界限かいがい、一つ木きの弁天べんてんなど、なると、今では余程工場よほどこうばの烟けむりに濁にごつたもの、昔風むかしふうの土蔵造りどぞうつくの家の前うちまへなどを通とほると少すくなからぬ傭人やうじんを使つかつて居ゐながら愛娘まなむすめに赤あかの襷たすきを締しめさせて、時代じだいに光ひかつた出格でがふしを拭ふかせて居ゐるのを眼めにする。そしてそんな娘むすめにこそ、江戸えどの老舗らうぽのお嬢おぢやうさんらしい物腰ものこしと気前きまへとを観みるのである。概がいして昔むかしの江戸風えどふうの女をんなは、特殊とくしゆな遊び場所あそびばしょなどは別べつとして、今では殆ど表面まへんから見みることは出来なくなつた、私の住む麴町むかしあたりでも、大きな薬種屋やくしゆやとか酒屋ざかやとかのお内儀うちぎさんには、今も昔の風其ふうその儘ままが残のこつて居ゐるが、店みせに出るこなどとは減多めつたになくて、一年一度いちねんどの祭祀さいらいに御神輿おみこしを練ねる時など、ほのかにそれと窺うかがはれる位である。引かへて足一度あしび深川ふかやに入いれば、豆腐屋とうふやの内儀うちぎの顔かほにも、魚屋さかなやの娘むすめの着物きものにも、江戸らしい気分きぶんの漂たふよつて居ゐるを知しるであらう。殊ことにその住居すまゐや町まちや周囲しうゐの景物けいぶつがそれがふさしい情調じやうてうを奏かなで、居ゐる。麻布あさふの十番じふばんといふ所も別べつな一廓くわくをなしてあれだけ違ちがつたこみくしさを有いうして居ゐる。然しかしこゝは江戸情緒えどじやうちよといふよりも、東京市民かうきやうしみん

のうちようぢよしした生活の状態が、誇張されずに美化されずに、艶を消されて出て居るのである。それとは違つて又一種のあるのは赤坂氷川神社の境内である。あそこの面白さは、人間に対してでも自然に對してでもない、飛行機の航行中空中で「空氣の懷」即ち其空にぶつかるといふのが、丁度それである。「」都會といふ大きな氣流のたぐの中に人の氣附かないこつそりとした真空地がある。家々に囲まれて別に小高い丘でもなく、平地に茂つた僅かの森樹が蔭をなして、そこは子守娘と犬の外、訪ふ人もない。さうしたところにじつとして、浸潤して来ては消えてしまう都會の騒音を聴いて居ると、広重も北斎も知らなかつた、大正の都會詩がそこはかと湧き出すのである。

(生活「四ノ三」)

【注記】

文末に「(生活「四ノ三」)」と明記されているとおり、内容は、談話「都會詩を味ふ為の下町横町」(『生活』第四卷第三号、大正五年二月)の一部再掲である。

『鏡花全集』別卷(第二刷/岩波書店、平成元年一月)所収の本文との異同として、ルビや読点の全体にわたる付加をはじめ、付されたルビの相違などが挙げられる。

掲載誌『実力世界』は、おそらく大正四年の創刊であり、大正六年七月まで巻号を重ねた。前身誌にあたる『読書之友』(読売新聞読書会、明治四十五年五月〜大正三年三月)、『読書世界』(読書会、大正三年四月〜大正四年十二月)については、佐藤哲彦「解題『読書之友』・『読書世界』——「読書」の拡大と変容」(浅岡邦雄監修/宮里立士・佐藤哲彦別巻編集『書誌書目シリーズ79 読書之友・読書世界 別巻 解題・総目次・執筆者索引』ゆまに書房、平成十九年九月)に詳しい。

雑誌『読書世界』と『実力世界』とが「合併」した経緯は、『実力世界』第五号（実力協会、大正五年一月一日）誌上の「『読書世界』合併杜告」により、次のようにかがえる。

読書は必要なり、然れども是れ手段のみ、実力養成の必要なるに如かず、殊に現代の世界に於て、単に書を読むと云ふ事のみにて、善く何事をか為さるべき。『実力協会』は日本刻下の急要に迫られて生れたる一勢力なり。而も其機関たる『実力世界』の主幹池田常太郎（前読売新聞編輯長）は、従来此二様の雑誌が同一同人の手に成り従つて力を分つの不利なるを憂ひ、這回相計りて、之を一に纏め、単に『実力世界』のみの読者に対しては、新に読書の趣味を鼓吹し、単に『読書世界』のみの読者に対しては、更に摯実剛健なる国民的大思想の作興を是れ努めんとし、随て『読書会』の名も、今後は之を「実力協会」と改むる事となせり。こうして『実力世界』は、「読書と実力の養成と相待つて、我邦現下の萎靡振はざる国民思想を鼓舞刷新して、以て世界の大勢を叱咤する」べく再出発したわけである。ただし、そのような雑誌に、鏡花が一年前に発表していた談話「都会詩を味ふ為の下町横町」が一部再掲された経緯は詳らかでない。

■5 泉鏡花身の上話

【典拠】『実力世界』第八卷第三号、大正六年三月七日

*署名「一記者」。36～37頁。小見出しは省略した。

べつだんしゅぎ なん
別段主義の何のツていんぢありませんが、私（わたし）は開（ひら）く云（い）ふことは不賛成（ふさんせい）の方（はう）でして、……一体（たい）近頃（ちかごろ）は妻君（さいくん）が亭（てい）

主と肩を並べて往来でも何処でも散歩するやうになりましたが、十四五年前までは、銀座辺で开んなのを見掛けると、夫れは全く驚歎したもんですヨ、夫婦と云ふものは、年中鼻を突合してるんだから、何も外へまで一緒に出なくツてもネ、……嬢アも偶には、ノン／＼したからうし、野郎の方もネ、……近來は野郎が箒を提げたり乳母車を押したり。

私等の嬢アは出不勝ですし、芝居にでもと云へば、お小遣が要るし、……第一、我々所なぞの嬢アとなると、之で案外忙しいもんですヨ、鳥渡出て帰つて来ると、白足袋の洗濯でしやう、女中では綺麗にならないツてんで、自分で洗ひます、夫れから斯んな茅屋でも住つてるから日に一度は拭掃除もせねばならず、夫れから総菜拵らえ、之が又気毒な程厄介でして、开うですから家のやつは、滅多に出たこたアありません、横寺町の先生（尾崎紅葉）も歿る少し前に、神楽坂までアイスクリームを喰べに出たのが、夫婦連れで歩いた始終、奥さんも亦嫁に來た時の駒下駄が、後家になる迄有つた程出不勝だった。私の喰物ツて云つても大した面倒はありません、変つた物や生物がいけませんから、マア鯛の様な物を煮たり焼いたり、……で無くば豆腐か慈姑の煮たの位で、お仕着の一本をネ、……小肴の胴を斜に切たやつは降参です。

アノ千代紙の蔽ですか夫れは斯うなんです、虎列拉々々ツて云つたツて、煙管の吸口を蠅の中へ曝して置くぐらゐる危いこたあ無エツてネ、其処でソレ斯んなもの千代紙で筆の鞘のやうなやつを拵へて一服済むと直ぐ吸口へ被せる仕組——を斯うしたら、夫れが大袈裟に伝はつたと云ふわけなんです。

手紙の話、あれは本当です、横寺町の玄関に居た頃毎晩寝る前に、夜中郵便函を開けに行つて沢山來た中から親父の手紙を手さぐりで引当る、別に何処がドウと云ふんぢや無いが不思議に當りましたネ、併し要する

に偶中りですから、俺が当てゝ見せると断言すべき筋合のものぢやありません。

ポストの堂々廻りと云ふのは、何しろ朝から晩までウン／＼云つて一回分づ、先生の書かれた金色夜叉でしやう、そいつを私が抛り込んだあとで、万一落こちてはしやしないかと思つて、偕こそ念には念を入れ、ポストの廻りを見たと云ふことなんですが、つまり夫れが私が愚痴なんですがネ、でも家に居て、別段嬢アなんぞに八釜しかありません。……………

【注記】

四つの小見出し（「細君天下は不賛成也」、「嬢は中中忙しいです」、「千代紙の吹口おほひ」、「手紙とポストの話」）は省略した。内容は、談話「私の配偶」（『報知新聞』夕刊、大正六年二月四日（五日））の再掲である。ただし、『新編泉鏡花集』別巻一（岩波書店、平成十七年十二月）所収の本文との異同として、全体にわたる読点の付加や、文章の少なからぬ改変などが目立つ。

前月発表の談話「私の配偶」が再掲されるに至った経緯は、前項同様に不明である。

■ 6 河豚でお茶漬（金沢）

【典拠】『婦人倶楽部』第九卷第十号、昭和三年十月一日

*署名「泉鏡花」。329～331頁。傍点は原文。

すでに故人になりましたが、わたしの叔「伯」父で、松本金太郎といった宝生流の能役者は、いたつて豆

腐が好きで、豆腐屋から通帳で豆腐をとるといふ次第。随分物価の安い時分でしたが、それで毎月相応に支払ひをして居りましたことを子供心によく覚えて居りました。それでお客がありますと、自慢で豆腐料理を出します。それが悉く松本一流の調理法で、秘伝秘法の一つを、そつと申上げれば、焼豆腐などを煮る場合、先づ最初大釜に豆腐がひた／＼になるまでお酒をどくどくと入れます。勿論、清水も少しは割ります。それをとろ火でゴトゴト気長に煮る。煮上る前に一寸、味淋なり醤油なりを加へて味を見らるといつた風情。うまいにはうまいが、家庭料理には一寸贅の部になるでせう。



家庭料理としての金沢名物は、蕪のなれずいでせう。葉を捨てた中位の蕪を横に二ツに切り薄く切つた蕪の肉を蕪と蕪との間に挟んで、サンドイッチのやうにこしらへて、ちよつと離れないやうに縛つておき、これを麴漬にして、半月ばかり経つて、食べ加減になる頃を見て出します。多く歳晩に米屋とか、薪屋とかいつた出入の商人からお得意先きにお歳暮にも送ります。それを正月かるた会なぞで、お茶菓子の代りに食べるといふ趣向です。



下等な食物ですが、金沢通の以てうましとするのは鯡の糠漬です。みがき鯡を米糠と塩で塩梅した糠味噌に漬けこみ、圧石をかけて、いゝ加減な時分に取出して焼いて喰べる。臭気ふんぶんとして、他国の人は、ちよつと辟易いたしますが土地の者は、その匂ひを喜びます。ことに味噌を払はずに焼くところを通しします。これは鯡にかぎらず鰯でもよいと思ひます。



つぐみのジブも金沢名物といへませう。鵜の肉をメリケン粉でまぶして、平鍋へ煮立てた油の中にちよつと投りこんでは揚げ、投りこんでは揚げて、熱いうちを山葵醬油で食べるのです。つまり鵜の天ブラですが可成北国情調のものです。



粹なものは河豚のすじといつて、河豚の上等な肉を薄塩にして、カラ／＼に乾したものです。それを、ちよつと焙つて、端から裂いて喰べる、ビールのお肴にもいい、がお茶漬のお肴には最もいい。死んだ紅葉先生は、有名な悪食家で、舌は随分贅沢であり、めつたに名物を賞めなかつたが、此のすじばかりは賞められた。『泉―食べても大丈夫か』と、当時玄関番を承はつてゐた、わたしの机の傍へ、わざ／＼念を押しにいらしたお姿が、今でもまぼろしのやうに目の先きにちらつきます。

【注記】

掲載誌『婦人倶楽部』（大日本雄弁会講談社）は、第九卷第九号（昭和三年九月）から第九卷第十二号（昭和三年十二月）まで、四回にわたつて「味覚なつかし私のお国料理」の欄を設け、十五名の著名人による談話を並べた。鏡花はその二回目に、日本画家の川合玉堂（秋鮎のうまさ（岐阜））、帝国劇場専務の山本久三郎（いなご礼讃（群馬））、高浜虚子（緋の燕の珍味（松山））とともに名を連ねる。

『婦人倶楽部』への鏡花の寄稿は、小説「河伯令嬢」（昭和二年四月～五月）が連載された前年以來。なお、「河伯令嬢」前篇が掲げられた第八卷第四号には、「鏡花先生礼讃」と題された野村愛正の一文も載る。

本談話は、「いたって豆腐が好き」な伯父・松本金太郎の「秘伝秘法」の「豆腐料理」にはじまり、「金沢名物」の「食物」を紹介する内容となっている。言及される逸話や料理の数々は、談話「三つの色々酒と色と味」―（『新小説』明治四十五年二月）、雑誌「寸情風土記」（『新家庭』大正九年七月）、小品「湯どうふ」（『女性』大正十三年二月）、「麻を刈る」（『時事新報』夕刊、大正十五年九月二十三日～十月八日）等において、鏡花がたびたび取り上げてきたものだった。

■ 7 ふぐ料理について／鏡花先生より

【典拠】『婦人倶楽部』第九卷第十一号、昭和三年十一月一日

*無署名。319頁。傍点は原文。

◇ある日、本誌の料理部の記者が、鏡花先生をおたづねして、俳談や、料理談をお聞きした。ところが何しろ料理通の先生のこと、滾々として材料がつきない。それで先生から『誌上には掲げないやうに』と念を押されたが、余りに惜い気がしたので、先月の本欄にその談話を掲げたのでした。

◇ところが、鏡花先生から『あの河豚料理は、まったく誤謬である。河豚は素人料理をすると危険この上ない。あの項は取消してほしい』といふお話があつた。その為に先生はをち／＼眠られないで心配なすつたと聞き、全く恐縮の外ないわけです。先生が心配なさるやうに編輯部も心配ですから、読者諸姉、河豚の素人料理はなさらないやうに。

◇それから、紅葉先生が御賞味になったのは、燕のなれず、しだつたさうです。重重此欄でおわびします。

【注記】

内容は、前項「河豚でお茶漬（金沢）」の一部訂正を伝える「編輯部」からの「おわび」である。「紅葉先生が御賞味になったのは、燕のなれず、しだつたさうです。」という記者の報告により、鏡花が雑誌「寸情風土記」（『新家庭』大正九年七月）において、「燕の鰯とて、鰯の甘塩を、燕に挟み、麴に漬けて圧しならしめたる、いどりに、小鰯を紅く散らしたるもの。此ればかりは、紅葉先生一方ならず賞めたまひき。」と記していたところと齟齬がなくなる。

一方、小品「麻を刈る」（『時事新報』夕刊、大正十五年九月二十三日～十月八日）には、「糠漬の大河豚」を「遅い朝御飯に茶漬けで、さらく」と食した紅葉への言及が見える。そこでは、食後しばらくして「懷手で少し鬱し」ながら、鏡花に「あの、河豚は、お前も食ったか。」「おいら、少し腹が疼むんだがな。」などと声をかける紅葉の姿が印象深く書きとめられている。談話の「誤謬」は、あるいはこのような挿話との混同に由来するものか。

■8 百々之助独立作品に／泉鏡花氏憤然怒る／『金色夜叉』の冒瀆は怪しからん／原作料一千元を要求

【典拠】『キネマ週報 THE KINEMA WEEKLY』第十四号、昭和五年五月十六日

*無署名。11頁。活字の大きさは均等とした。

帝キネから独立した市川百々之助が独立第一回作品と銘打つて大部分の撮影を終った『剣劇「戟」から生れた金色夜叉』は、尾崎紅葉の『金色夜叉』の純然たる焼き直しである上にその名作を汚すも甚だしきものとして、紅葉門下の泉鏡花氏が憤然として這般文芸家協会に談し込んで来たが、

『実に怪しからん話です。金色夜叉を時代物の映画にするやうな話は当方では少しも知らぬ話で、全然交渉のない上に無断で、焼き直したりして故人の名譽を傷つけるも甚しきものですから、若し強ひて之れを興行するとならば相当の原作料を要求しなければなりません』

と語つてゐるが鏡花氏は百々之助に対して一千円の原作料を要求し若し応じなければ、断然たる処置をとる
と意氣「息」まいてゐる。

【注記】

掲載誌『キネマ週報 THE KINEMA WEEKLY』は、昭和五年二月、キネマ週報社より創刊され、昭和二十五年十月まで号数を重ねたようである。記事は、市川百々之助とその「独立第一回作品」である『剣戟から生れた金色夜叉』とに対する鏡花の「憤然」たる様子を伝えたあとに、「此の映画の試写に立会つた某氏」の談話を並べている。そこでは、「僕等当業者すら内容の下らなさに憤慨するんですから泉先生が抗議を申込まれるのは無理もないでせう。」などと語られていた。

「鏡花氏は百々之助に対して一千円の原作料を要求し若し応じなければ、断然たる処置をとる」と報じられた一件の経過は、調査が行き届かず、詳らかでない。ただし、映画『剣戟から生れた金色夜叉』（作者・尾崎紅葉、脚色者・笹尾純一郎、監督者・森本登良男、撮影者・玉井雅男）は、翌十七日に、常盤座で無事に封切られている。

出演は、浪人破佐間勘市／間貫一 市川百々之助、お美也 若柳みどり、武士 川崎猛夫・沖田英二・千葉八郎、鳴澤お宮 久野あかね、富山唯継 實川延松ほか。「略筋」によれば、「浪人破佐間勘市はお美也を想つて居たが貧しいため資力豊かな武士達にお美也を横取られて仕舞つた。／一方間貫一はお宮と許婚であつたが、ダイアモンドの魅力にお宮は富山唯継に走つた。／熱海の梅林に貫一は図らずも唯継とお宮のラヴシーンを見せつけられた。そして一月十七日熱海の海岸に貫一お宮の姿が月下に見られた。／かくて剣戟から生れた金色夜叉は展開されるのであつた」ようだ（編輯部「日本映画紹介／剣戟から生れた金色夜叉」『キネマ旬報』昭和五年五月二十一日）。

なお、映画『剣戟から生れた金色夜叉』の主演を務めた市川百々之助（明治三十九年五月八日～昭和五十三年一月十五日。本名は上田直正）の略歴は、『新撰芸能人物事典 明治く平成』（日外アソシエーツ、平成二十二年十一月）において、

明治44年、市川中軍「マ車」の門に入り初舞台を踏む。大正7年から少年俳優が演じる歌舞伎劇のスターとして浅草などで出演。11年に帝キネ小阪撮影所に入社する。初めての作品は当時流行の切支丹物「異端者の恋」で、チャンバラ流行の時代にあつて人気者となる。その後も美剣士スターとして活躍、年に20本内外の作品に主演した。昭和5年帝キネを退社し、舞台専門の旅興行に出るが、7年河合映画に入社。翌年には日活太秦に移り、「赤垣源蔵と堀部安兵衛」に出演、初の汚れ役として話題を集めた。戦後は百々木直と改名、東映時代劇などに出演した。

と紹介されている。

■ 9 鏡花・霊柩駕籠に乗る —— 十和田今昔物語り ——

【典拠】『HOTEL REVIEW（ホテル・レビュー）』第十九号、昭和二十六年十一月十五日

* 「三浦寅吉」による回想録。目次欄における題は、「鏡花霊柩駕籠に乗る —— 十和田今昔物語 ——」 18～22頁。
傍点は原文。

汽車の旅も昔のように楽になつたから……。と友人にすゝめられて、秋田から十和田湖を廻つて青森へ出ようというプランにつよく動かされた。それというのは十和田湖の魅惑もさることながら十和田湖は廿年前に泉鏡花先生と同行した珍奇な数々の思い出とが深かつたからである。

秋田の東北パルプの好意で友人のK君と私は同社の庶務課長の○氏の東道を得て、友人K君と、大館から花輪線の毛馬内へ出て、そこから休屋行の観光バスに乗る。（中略）バスは走るほどに発荷峠にさしか、ついていた。

晴れていれば湖を一望に眺められるものを……と嘆じながら、鏡花さんありし日の往時の思ひ出が犇々と迫ってくる。（中略）

晩酌の肴に同行の友人から、鏡花さんの秘話を聞かせると、せがまれた。時効にもなっているし、十和田が、あまりにも拓けて昔とおもかげがすっかり替つているので遂いうかくとしてしゃべつてしまつた。

鏡花老秘話というのはこういうわけ——。昭和二年の七月だつたと思ふが、当時の東京日日新聞の日本八景

選定に、十和田湖が当選した。そこで当選した八ヶ所へそれぞれ文壇の大家を特派して、紀行文を書いて貰うことになったのであるが、十和田湖へは旅行嫌いである有名な泉鏡花先生に白矢が立つた。デヤナリズムの皮肉というか、先生がこれに応じて腰をあげたゞけでも大成功だったのである。

主治医を同行すること、舟が嫌いだから舟に乗らなくとも旅行が出来るならという条件。そこで三角博士と社から文化部の高信君、それにカメラを持つ私ともう一人、三角さんの友人で洋画家の梶原貫五氏の五人で出掛けることになった。

東北本線の古間木から入って奥入瀬の溪流に沿って子の口に一泊、万事はそこでプランを樹てるといふ仕組だった。景勝会から案内役として小笠原という人が参じた、この人、先生の筆によると、鉄骨銅身にして、赤靴を毛脛にかゝった武者——という型の人だった。

さて舟に乗らざる十和田周遊の案がねられたが、銅身赤靴居士は東北弁まる出しでどうしても舟に乗つていたゞかないことには、十和田観賞は出来ない旨を力説したものだ。すると鏡花先生「なに私はお前さんに傭はれて来たんぢやねえよ、どうしても舟に乗れというならけるよ」眼鏡ごしにギョロとにらんで江戸っ子肌の歯ぎれのよさに、あわてたのは銅身さんより同行のわれ／＼、博士もT君も、まア／＼私たちがついていきますからと一汗。俵を三本木から取寄せて湖畔をゆけるところまで行かうということだけでけり、が着いた。鏡花先生の「啄木鳥」から当時の十和田一周記をとこ／＼拾つてみよう。

(中略)

以上は「啄木鳥」から抜萃した当時の十和田湖畔の姿である。宇樽部へ着いたときは、よほど嬉しかったの

か先生は更らに……たすけたまう姫神の使者の半襟の色を見る思いがしてかつ可懐^{なつか}しさに夏帽子をとつて礼して通つた……とも云つてゐる。

休屋の宿では、すっかり御氣「機」嫌で徳利の数も相当並べられたのである。

秘話というのは、これからの話である。宿屋から和井内、発荷峠への途は遼遠、俚にこりてか「駕籠」を探してほしいとの注文、大館の東日通信部へ斡旋を依頼してから二日目、先生には「極秘」の手紙つきで立派な「駕籠」が届けられた。その手紙は、『この駕籠はもとをたゞせばさる大名の愛用になつたものだが、今は特殊の人の葬式にだけ使う……霊柩車のような役目をしているが、消毒は充分してあるから心配はない。この点御含み願う』という文面だつた「。」

何しろ先生の潔癖な事は、アルコール綿を手離さず、献盃の如きはもとよりのこと、宿の味噌汁など携行の小鍋に、たき直さなければ口にしないほどのお仁だけに、この「駕籠」の由来が知れたらどんなことになるかわからないので、博士とTと三人で鳩首協議、絶対に口外しないことを堅く誓つた。

翌朝いよ／＼和井内から発荷峠まで、草をわけ、大樹横たわる途なき途を、籠かきは肩をかへ、汗をふき／＼、かけ声も出ず無言の行。駕籠の先生はと見れば、手拭を頭に小いきにのせて、あたかも箱根旧街道をゆられて行く風情で、煙管をくわえて大満悦の体、その姿を見るのもビク／＼ものだつた。発荷峠へ着いてかごに挟んだ草履をつつかけ「駕籠やさんどうも御苦労さまでした」とニコ／＼晴れて十和田の全貌を一望におさめる峠の茶屋に腰を下した。その瞬間、先生もわれ／＼も、思いはちがうがホット胸をなぜ下した。

こういう気苦労をした周遊の十和田だったので、今乗つて来た観光バスがドライヴ・ウエーを坦々と疾走する様や、説明の余暇に十和田甚句を吟ずる車掌さんのサービス振りに酔客声あり、「車掌さんうまいぞ、こつちへ来てお酌たのむ」「只今執務中でーす。」には、えましくも旅情を慰められ、鏡花先生ありせばの感、まことに深しである。

(元毎日新聞写真部長)

【注記】

掲載誌『HOTEL REVIEW』は、昭和二十五年五月に日本ホテル協会より創刊されて以来、今日なお号数を重ねる。第一巻第一号に掲げられた「発刊の辞」で、日本ホテル協会会長であった犬丸徹三は、「日支事変以来、総力戦の結果」衰頹したホテル業界を「今日」再興させるべく、

業界関係者一同が渾然一体となり、緊密に連絡協調して、施設の改善、サービスの向上はもとより、税制改正の対策、経営の合理化、労資の協調、接収ホテルの円滑なる運営、解除措置の適正、宿泊料金の全面的統制撤廃等山積せる諸問題を解決する媒体たらしめんと企図のもとに、関係各方面の要望にも応え、今回多年宿望の機関誌ホテル・レビューを発刊し、広く具眼の士の啓蒙的所説を求め、ホテル事業各般にわたる研究、調査と、諸外国に於ける最新事項とを報道し、業界人の声を紹介し、業界消息の周知につとめ、更に亦教養資料として、ホテル実務の紙上指導をなし、ホテル事業将来の発展を期し、国際観光事業に貢献せんと念ずる次第である。

と述べていた。

談話中にも言及されていたように、昭和二年七月、東京日日新聞・大阪毎日新聞両社の主催で「日本八景」が

選定され、「当選した八ヶ所へそれぞれ文壇の大家を特派して、紀行文を書いて貰うことになった」。「白矢が立つた」鏡花が十和田湖へと向かったのは、同年八月のことである。

三浦寅吉による回想録は、鏡花自身の紀行「十和田湖」(『東京日日新聞』昭和二年十月一日〜九日)、「御存じより」(『時事新報』朝刊、昭和三年一月一日〜七日)、「啄木鳥」(『サンデー毎日』昭和三年一月)、「十和田の夏霧」(『日本地理大系』5 奥羽篇)改造社、昭和五年十一月)には描かれなかったやりとりや「秘話」を伝え、「鏡花さんありし日の往時」を映し出す。

「船が嫌い」な鏡花の姿は、たとえば神部飛雄太郎編『修養と逸話』(173 泉鏡花船と聞きて眼色蒼然^マ)／東盛堂書店、大正八年十月)でも紹介されていたとおりで、十和田に向かうひと月半前の談話「熱い茶」(『東京日日新聞』昭和二年六月十三日、朝刊九面)ではみずから、「船だけは未だ苦手である。その中にまた、誰れかゞ私に船を好きにしてくれるだらうと思つてゐる。」と述べていた。しかし、その機会が十和田で訪れることはなかったようだ。

三浦寅吉の回想録が興味深い所以は、知られざる「鏡花老秘話」の紹介のみにかぎらない。というのも、鏡花の紀行文中では「社の写真班の英雄、三浦さん」(「十和田湖」)などとしか記されていなかった同行者のひとりの名が、ほかならぬ当人の署名が入った一文によって判明することになるためである。三浦寅吉の「略歴」は、雁魚來往研究会・會津八一記念館編『雁魚來往(四)』—小林正樹 小川晴暘・光暘 三浦寅吉 入江泰吉 土門拳と 會津八一の往來書簡—(新潟市會津八一記念館、平成二十八年六月)において、次のように確認できる。

三浦寅吉(1899—1968)は、明治32年2月24日東京市芝区金杉浜町(現・港区芝)に生まれる。

時事新報社写真部員を経て、大正14年大阪毎日新聞に入社、報道カメラマンとして数々の特ダネを撮り、(中略)昭和11年に大阪毎日新聞東京支店写真部副部長を、16年に東京日日新聞社(現毎日新聞社)新聞部長を歴任する。(中略)昭和20年10月、新聞社を退社して友人と写真通信社サンニュースフォトを創設する。(中略)昭和43年7月13日鎌倉にて逝去する。

この「略歴」に基づけば、鏡花らとともに十和田湖を周遊した三浦寅吉は、そのとき数えて二十九歳。もつとも、右「略歴」の典拠は明示されておらず、いささか訝しく思われる点もないではない。たとえば当人の訃報記事『毎日新聞』昭和四十三年七月十三日、朝刊十九面)と照らしたとき、逝去の状況や享年等の情報に、若干の齟齬が見受けられるからである。

三浦 寅吉氏(TBS映画社社友、横浜シネマ現像所顧問、元毎日新聞東京本社写真部長) 十二日午前八時七分、肝硬変のため東京大田区田園調布の中央病院で死去、六十六歳。告別式は十三日午前二時から港区高輪二の一四の二五、正覚寺で。自宅は目黒区柿ノ木坂二の一四の八。喪主は長男、浩氏。

この訃報にしたがえば、鏡花の十和田行きがあつた昭和二年、三浦寅吉は二十代半ば。いずれにせよ、おそらくは最も若い同行者としてカメラを構えていたことになる。

ところで、鏡花の十和田紀行にはもうひとり、未詳の同行者の存在があつた。三浦寅吉の回想に「社から文化部の高信君」と出てき、鏡花の紀行文中でも「社を代表の高信さん」(「十和田湖」)などと記された人物である。鏡花は、同じ昭和二年の「梅雨」時、東京日日新聞社の企画「大東京繁昌記」のため、深川の地を散策したが、その折にも「社の高信さん」が同行していた(「深川浅景」『東京日日新聞』夕刊、昭和二年七月十七日〜八月七

日)。深川と十和田で、鏡花に連れ立った「高信さん」は、はたして同一人物なのであろうか。

竊木清方『続こしかたの記』（山の手の住居）／中央公論美術出版、昭和四十二年九月）によれば、鏡花の深川めぐりに「同行して」いたのは「日日」の記者高信峽水であったという。清方が名前を挙げたのは、作家、編集者として知られる「高信峽水」そのひとだろう。高信峽水（明治十八年七月八日～昭和三十一年六月七日。本名は孝治）は、明治三十八年七月に早稲田大学を卒業後、実業之日本社に入社し、『婦人世界』編集長（明治三十九年一月～大正三十二年二月）を務め、のちに中央公論社に移っては『婦人公論』編集に携わった（大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典』第一巻、大日本図書、平成五年十月）。補っておけば、編集長として『婦人公論』を刷新させるのは昭和三年一月号からであるが、編集作業に関わりはじめた時期は、さらに遡れるようだ。木佐木勝『木佐木日記』第三卷（現代史出版会、昭和五十年十月）の「昭和三年三月二十六日」の項には、「峽水さんが嶋中氏に招かれて『婦人公論』を引き受けるようになってから一年以上にもなる」との記述が見出せる。

加えて、峽水は実業之日本社を離れたあと、愛の泉社を設立し、婦人雑誌『愛の泉』（大正十三年九月～昭和二年十月、および昭和五年一月）等の主幹として奔走してもいた。この高信峽水が、清方の回想するところでは、昭和二年当時において「日日」の記者」をも務めていたこととなる。ただし、それではやや多忙すぎるような印象も受けるのだが、どうか。

ときに、もうひとり、「社から文化部の高信君」に該当しうる者がいる。彼の名は高信喜代松といい、博文館発行の雑誌『独立』（大正十三年一月～大正十四年五月）の主筆を務めていたが、「博文館を去ると、東京日日に入って、千葉亀雄氏の文芸部に属し」、大佛次郎を推挙して「赤穂浪士」（『東京日日新聞』夕刊、昭和二年五月十

四日（昭和二十八年十一月六日）連載に与った人物である（野尻抱影「思い出のままに②／『浪士』の陰に」『大佛次郎時代小説全集 付録月報15』朝日新聞社、昭和五十一年五月）。この高信喜代松は、大正十五年にはすでに東京日日新聞社に籍を置いていた。歿したのは昭和十七年であり、次の訃報記事（『東京日日新聞』昭和十七年五月二日、朝刊三面）から、生年は明治十九年ごろであったと推定できる。

高信喜代松氏 元本社社員高信喜代松氏は、一日午前三時脳溢血のため大森区馬込西四丁目二、八六三の自宅で急逝した、享年五十六、告別式は三日自宅で執行の予定、遺族は理研鈴木研究室勤務の美代子さん（三）外一男二女がある

昭和二年、深川と十和田で鏡花の傍らにいた「社を代表の高信さん」とは、はたして高信峽水と高信喜代松のどちらであったのだろうか。現時点では特定するに至っておらず、さらなる調査が必要である。鍋木清方『続こしかたの記』の検証を含め、今後の課題としたい。

【追記】

本稿の校正中に、泉鏡花記念館の企画展「1927―昭和2年の鏡花」（平成二十九年十二月九日―平成三十年五月十三日）にて、出品された「泉すず宛ハガキ 昭和2年（1927）8月4日17日付」に関連して鏡花の十和田周遊に同行した記者「高信さん」が高信喜代松であると紹介されていたことを、確認できた。これにより、鏡花が十和田湖に遊んだ折りの同行者がすべて判明したことになる。

◆ 紹介に際して、穴倉玉日氏、田中励儀氏、吉田昌志氏から御教示を賜ったほか、国立国会図書館、泉鏡花記念館のお世話になった。記して深謝申し上げる。